中国新聞　（第三種郵便物認可）

ヒロシマ平和メディアセンター　http://www.hiroshimapeacemedia.jp/

米軍による原爆投下の当時から残る被爆建物は、いまなお77年前のあの日の悲惨を伝えている。原爆ドーム（広島市中区）や平和記念公園のレストハウス、さらには現存する４棟の事実上の保存が決まった旧陸軍被服支廠（南区）は、国内外に知られた存在だ。一方で、普段から目に留まることは少ないものの、ほかにも私たちの身近に「物言わぬ証人」がたたずんでいる。それらを訪ね歩き、光を当てる。（湯浅梨奈）

被爆建物を歩く

「証し」の壁板 そのままに

教専寺本堂

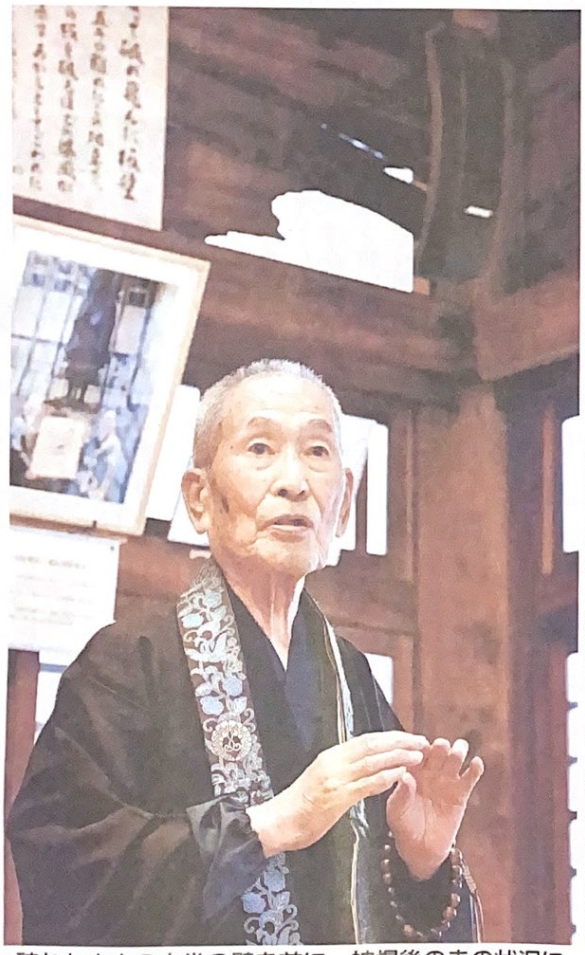
厚さ2センチほどの木の壁板が、爆風で破れたままになっている。浄土真宗本願寺派教専寺（広島市西区）の本堂は、爆心地から約4・9キロの草津本町にある。「惨状を伝える証しにしたいのです」。前住職の故選一法さん(83)は、修理をせずそのまま残している。

原爆が投下された1945年8月6日以降、本堂に兵隊たちが寝泊まりし、市街地での救護や後片付けに向かっていたと故選さんは記憶する。広島原爆戦災誌には「十二月ごろ、草津・庚午地区町民犠牲者約七〇〇体の合同慰霊祭を教専寺において盛大に執行した」と書かれている。

築10年だった教専寺の本堂は、倒壊は免れたものの窓ガラスが割れるなどの損害を受けた。本堂内部の柱に、ガラス片を浴びた無数の跡が残る。壁板の穴も、その時にできた。故選さんは穴の傍らに「爆風が吹いたことを示すあかし」との説明書きを掲げ、参拝者たちに伝えている。県外の児童たちが時折、平和学習の一環として見学に訪れる。

草津国民学校1年生だった故選さんは、世羅郡（現世羅町）に集団疎開していて被爆を逃れた。しかし、広島二中（現観音高）1年の兄浩行さんは、爆心直下の中島本町（現中区）で建物疎開作業中に被爆。翌日、息を引き取った。寺の総代ら13人も市内で被爆死したという。

肉親たちを失った悲しみを胸に平和を訴えてきた故選さんを、長男の正法さん(55)が継ぐ。「爆心地からこれだけ離れた場所にも被害が及んだことを伝え続ける建物。父の思いを受け継ぎ、残していきたい」



破れたままの本堂の壁を前に、被爆後の寺の状況について記憶をたどる故選さん　（撮影・田中慎二）